

避難訓練＋生活・社会科とのクロスカリキュラムによる防災授業

玉川大学 教授 教育学部長・通信教育部長 寺本 潔

1. 避難訓練だけにとどまらない

防災授業が重要

昨年は各地で災害が頻発し、被害にあわれた方々が「これまでに体験したことがない」、「50年間もここに住んでいるけれど初めてだ！」などというのをテレビで聞いた。温暖化の影響などで気象が変わってきているにもかかわらず、人は自分が被害にあうとは思わないで生きている。前号でも指摘した「正常化の偏見」とよばれる心理である。

これにうち勝つためにも視野が広く複眼的な思考を防災教育にもたらす必要がある。特活の時間を使った年3回の避難訓練だけでは、子どもたちは受け身にとどまり、想定をこえる場面での適切な判断ができない。最も大切なことは災害による危険予測・回避（自助）能力を高めること、さらに共助や公助の意味を理解し、自らも防災活動に参加していこうとする態度を養うことである。

2. 「正常化の偏見」にうち勝つ

メンタルマップの役割

複数の情報源から状況を確認し、また聞きや伝聞で判断しない冷静な判断力をもつことは、小学生の場合、なかなか難しい。しかし、最低限自分の現在位置を頭のなかの地図で正しく把握できる能力（メンタルマップ）は必要である。子どもは、かつて探検遊びが活発で自分の学区程度は熟知していた（寺本潔著『子ども世界の地図―秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間』黎明書房、1988年発行 参照）。

ところが現代の子どもはそうではない。通

学路と塾や公園までの道しか知らず、川の土手、山の崖下、用水路沿いなどに行ったことがない子どもが多い。近隣の低い土地が海拔何メートルであるかさえも知らない。だから、危険予測をする具体的な学習場面を用意し、いざというときに自助が可能な能力を身につけさせる必要がある（写真1）。



写真1 電柱にはってある海拔表示を確認する小学生

個人的な体験で恐縮だが、次の写真は2011年3月11日の東日本大震災発生から20分後に筆者が撮影した東京湾の埋立地（東京ビッグサイト北側）のようすである（写真2）。とっさに津波のことが脳裏をよぎったが、水辺を見ても引き波が見られないこと、東京湾の形から大津波は湾奥にすぐには達しづらいこと、歩道の液状化が小規模であったことから、冷静さを失うことなく避難できた。その後、

公共交通機関はほとんどまひしている状況だったが、幸い都心のメンタルマップが私の頭のなかにできていたので、最短ルートで自宅（世田谷区）まで徒歩で帰宅できた。メンタルマップは災害時帰宅の心強い味方にもなる。



写真2 足元の歩道から砂が噴出し液状化の跡があちこちにみられた。

3. 知らせる→(消す)→(助ける)→逃げる

大地震の際に電話やメールなどの連絡手段が切断されると人は平常時以上につながり欲求が高まり、その欲求が時間を経ても満たさ

れない場合、強い不安感や孤立感に襲われる。だから自分が今どこにいるのか、大切な人に被害がないかを災害用伝言ダイヤル（171）などを用いてたがいに知らせ合うことが大事になる。しかし、そのことよりも先行すべきは、近くで発生した火災を周囲の人に「知らせる」ことである。地震による火災は同時に何十～何百か所で起きるため、**公助**（消防車による消化活動）は期待できない。**共助**による初期消火が人命や財産を守ることにつながる。津波の場合と異なり、真っ先に避難場所に逃げることを教えても公民的資質は育たない。子どもでも火は発見できる。「炎が見えたら、すぐにまわりの人に正確にその場所を知らせよう。消せるような小さな火なら大人の人と消そう！」を合言葉にしたい。場所を説明できる言語力は正しいメンタルマップの形成なくしては育たない。

改めて生活科や社会科で子ども自身の頭のなかに地図が形成できる指導を重視したい。以下に指導のポイントを整理した。

学年と単元名	メンタルマップ形成と社会参加をうながす学習活動例	教材・教具
【低学年】 生活科 2年 「つうがくろたんけん」	短冊状の用紙に自宅から学校までの通学路地図を描き（線的でよい）、安全を守ってくれる人や施設、注意すべき箇所を書き込み、8人分の地図を学校を中心に四方位に注意してはりつけながめ合う。	通学路を描くための縦50cm×横15cmの用紙と気づきを書く付箋
【中学年】 社会科+特活 3年 「私たちの市のようす」	学区や市の平面地図で海拔の低い場所や崖下に着色させ、自分の通学路や塾・公園までの道との位置関係を把握させる。特活で実施する避難訓練で地図を読む機会をつくる。	等高線もしくは海拔表示が入った学区の白地図と色鉛筆
【高学年】 社会科+特活 5年 「自然災害の防止」	災害を減らすための自治体や国の活動を知り、ハザードマップや災害後の復旧も考慮した防災計画を調べる。さらに家で用意するマイ防災バッグに入れる物を考える。	自治体発行のハザードマップと防災バッグの見本

命を守る防災宝箱



- ①避難訓練だけに力点をおかず、生活・社会科でも防災の授業をつくろう。
- ②防災力の一環として子どもの頭のなかにメンタルマップを育てよう。
- ③自治体発行のハザードマップを教材として活用しよう。